

高校における探究について -札幌聖心女子学院での事例

北海道大学大学院環境科学院

環境起学専攻 実践環境科学コース

小路 楓

2022年から学校現場で「総合的な探究の時間」が導入される。これは、答えのない問いに取り組むことを通して生きる力を養うためのものである。学習指導要領全体を通じて「自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現すること」という4つの過程が示されている。生徒の学び方・教え方が大きく変化し、溝上(2019)は、教授パラダイムから学習パラダイムへのシフトが起こっていると述べている。IB(国際バカロレア)やSGH(スーパーグローバルハイスクール)やSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の取り組みでは、自ら学ぶ、探究的な活動を重視している。そのような取り組みをもつ学校ならば、学校内の先行事例やノウハウがあるが、そうでない高校では、総合探究の導入について戸惑いが見られる。本研究では、IBの調査研究指定やSGHの経験を持つ札幌聖心女子学院の探究活動を対象として、他校でも実施できるかどうかという点に注目して考察する。札幌聖心女子学院にて授業の参与観察(計13時間)および担当している教員2名に対してセミフォーマルな聞き取り調査(計8時間)、本校の卒業生2名に対して聞き取り調査(計3時間)を行い、どのように探究に取り組んでいるのかを調査した。他校の高校教員等にも、探究活動について、ノンフォーマルな形で聞き取り調査を実施した。それらを質的データ分析した。その結果、(1) 課題の設定: 生徒が主体的に探究活動のテーマが見つけられるか、(2) 整理・分析: 見つけたテーマについて自分の考えや意見が作れるかどうか、ということに対して、札幌聖心女子学院の探究活動では上手に対応している一方、他校では対応し切れていない現状が見つかった。本研究では、これら2点について、考察することにする。

(1)について: 多くの生徒にとって、社会問題になじみがないために、取り組みたい具体的なテーマを見つけることがとても難しい状況にある。札幌聖心女子学院では、朝のお祈りの時間において日ごろから社会問題と身の回りのことを結び付ける社会学的想像力を育むことや、クリスマスコンサートのよう到来年や再来年に自分たちの行うこと(1年生にとって2,3年生に行うこと)をイメージさせる機会がある。こうした機会がしくみとしてあることによって、生徒がテーマを決めやすくなる環境が作られている。

(2)について: 多くの場合、生徒の考えや意見が含まれておらず、調べて得た情報を表面的にまとめる調べ学習のようなもので終わってしまうことが多い。札幌聖心女子学院では、公欠制度を利用することを含めて、生徒が学校外に出て学んだことをもとに、自分の考えを教員との対話のなかで言語化し、自らの学びを深め、発表や発信などの行動につなげることができている。教員自身に積極的に学ぶ姿勢があることも、生徒の学びの深まりを助ける一因である。中学校でも(2)につながる授業が行われていた。

IB等の経歴を持たない学校でも、札幌聖心女子学院で見られた、(1)1分間スピーチのような機会でも社会学的想像力を養うこと、および、(2)対話のような言語化を通して学びを深めることによって、調べ学習から探究活動にすることができると考えられる。こうしたしくみを中高通して繰り返し、徐々に高度化させていくことによって探究活動のベースとなる能力が身につく。